

「青少年指導者のためのマネジメントセミナー」 ～野外活動におけるリスクマネジメント～

平成 26 年 2 月 26 日（水）～28 日（金）2 泊 3 日



I 事業の背景（必要性）

国立中央青少年交流の家（以下「中央交流の家」という。）が実施する「マネジメントセミナー」は、今年度で 4 年目を迎える。「マネジメント」は、主にビジネス領域で用いられているが、組織内の限られた資源・資産・リスクを管理し、運営上の効果を最適化する手法として、青少年教育に携わる指導者も身につけることが必要である。

本年度の「マネジメントセミナー」は、野外活動における事故や危機をテーマに設定し、青少年の野外活動に関係する指導者が、緊急時に発揮できるスキルを身につけられるようにした。

II 事業の概要

1. 趣 旨

野外活動を中心とした青少年教育に携わる施設・機関・団体等で、チームリーダー的な役割を担う者を対象に、野外活動の安全管理のためのマネジメントスキルを、講義と実践的な演習を通じて習得し、組織の改善・活性化及び自己の向上を図る。

2. 参加者

（1）対象・募集人数

野外活動を中心とした青少年団体に関わる者 20 名程度

（青少年教育施設・教育委員会・教育研修所・青少年団体・NPO 法人・民間自然学校
自立支援機関・青少年厚生施設等で勤務及び活動する者）

（2）参加状況

参加者 男性 22 名 女性 6 名 計 28 名

<施設別参加者>

	男性	女性	合計
国立青少年施設	5	0	5
公立青少年施設	7	3	10
教育委員会	3	0	3
公共施設	2	0	2
青少年団体	1	3	4
その他	3	0	3
学生	1	0	1
合計	22	6	28

<参加者年代>

	男性	女性	合計
10 代	1	0	1
20 代	2	1	3
30 代	5	0	5
40 代	8	2	10
50 代	3	3	6
60 代	2	0	2
70 代	1	0	1
合計	22	6	28

<参加地域>

県別	男性	女性	県別	男性	女性	県別	男性	女性
北海道	1	0	埼玉県	2	0	静岡県	2	1
青森県	1	0	千葉県	1	0	愛知県	1	2
岩手県	0	1	東京都	2	0	滋賀県	0	1
山形県	1	0	神奈川県	1	1	兵庫県	1	0
福島県	3	0	富山県	1	0	沖縄県	1	0
栃木県	1	0	長野県	1	0			
群馬県	1	0	岐阜県	1	0	合計	22	6

(3) 広報の方法

- ① 開催要項・募集ちらしの郵送
 - ・国公立青少年教育施設
 - ・全国都道府県・政令指定都市青少年教育担当課
 - ・近隣市町村青少年教育担当課
 - ・青少年団体等
 - ・過去の研修会参加者
- ② 交流の家ホームページに要項の掲載

3. 日 程

26日 (水)	13:30		14:00		16:30		18:30		20:30	
	受付 13:00～	開講式 オリエンテーション	講義・演習Ⅰ 「野外活動におけるリスクマネジメント」			移動・入浴	情報交換会 (夕食含)			
27日 (木)	9:00				16:30		17:00			
	講義・演習Ⅱ 「野外活動におけるリスクマネジメント」 ※昼食・休憩(12:00～13:00)					夕食・入浴				
28日 (金)	9:00		10:30		11:30		12:00			
	講義「緊急時に対応できる組織作り」	グループディスカッション	閉講式	(解散) ※希望者はレストランで昼食						

4. 内 容

(1) 講師

- ① 【講義・演習ⅠⅡ】「野外活動におけるリスクマネジメント」
 講師：backcountry classroom Inc. 代表取締役社長 岡村泰斗 氏
 補助講師：びわこ成蹊スポーツ大学生 津々木健香 氏
- ② 【講義・グループディスカッション】「緊急時に対応できる組織作り」
 講師：一橋大学大学院 商学研究科 教授 古川一郎 氏
 NPO 法人体験型科学教育研究所 専務理事 古川 和 氏

(2) 講義・演習

① 第1日目「リスクマップ」

各施設の環境やプログラム活動中に発生が予想されるリスクを、グループワークを中心に書き出し、予想される損害の大きさと発生頻度から分類した。その後、経済的

損害、物的損害、人的被害等に対する必要な対策を検討した。また、大事故発生の裏には軽微な事故があり、傷害を負うには至らない多くのヒヤリ・ハット事例がある（ハインリッヒの法則）ことから、事故寸前回避事例を報告シートにする方法を紹介した。



② 第2日目 午前「クライシスシナリオ」

野外活動で必要物品や、準備すべき救急品について講義を受け、各グループで装備品を整えた。その後、グループ行動中の緊急時を想定し、4場面の救急対応について実習を行った。

- ア。「登山中に突然倒れた（呼吸有り、脈有り、意識なし、貧血の傷病歴）」
- イ。「登山中に何か虫に刺された（急性ストレス反応（パニック）、局所のアレルギー反応、アナフィラキシーの傷病歴、エピペン、抗ヒスタミン持参）」
- ウ。「登山中に転倒、手首、掌にケガを負った（手首の不安定なケガ及び掌の創）」
- エ。「2名の登山者が、登山道から滑落、重傷を負った（A:上腕の安定したケガ、B:脊椎損傷の疑い有り、下腿解放骨折）」

各シナリオとも、講師が事前に傷病者役を指定、状況や症状の打ち合わせをして事故発生を再現した。班員には知らされていないため、突然発生した班員の事故への対応について、戸惑いながら処置を行った。リアリティある演出演技を行った傷病者役があり、受講者からは、「突然の事故に、何をして良いか混乱した。」「今までの救急品では装備不足であることが分かった。」などの感想があった。



③ 第2日目 午後「ディベート」

「野外教育時の効果はリスクよりも価値がある」「野外指導者は常に参加者の目の届くところにいなければならない」の二つの命題に対し、肯定側、否定側に分かれディベートを行った。相手を論破するための思考プロセスを通し、リスクに対する捉え方を多角度から分析するスキルを磨くなど、実践的な研修を行った。

④ 第2日目 夜間「クライシスコミュニケーション」

非常事態の発生時における情報開示の実習を行った。「増水による沢遊びでの死亡事故」、「女子児童に対するキャンプ中のセクハラ」の2場面を想定し、記者会見のシミュレーションを行った。

会場には、投光器やストロボなどを用意し、記者役からは多数の質問が出されたことで臨場感あふれる実習になり、スポークスパーソン役からは「自分の想定外の質問を多数出された。準備不足だった。」「かなりプレッシャーを感じた。しかし、今後無いとも限らない経験をすることができた。」などの感想があった。



⑤ 第3日目 午前

最終日の午前には、一橋大学大学院商学研究科教授古川一郎氏と NPO 法人体験型科学教育研究所専務理事古川和氏を招き、「緊急時に対応できる組織作り」のノウハウについて

て講義を受けた。企業戦略をヒントに、「リスクは組織、集団で向き合うことが必要であり、想定されている範囲であれば、具体的な仕組みを考えることで、リスクをマネジメントできる。」「優れた組織風土を高めるためには、内発的動機（自律的行為）を引き出すことが大切である。」というアドバイスを受けた。

5. 評価

(1) 評価の方法

プログラムと運営面の4項目についての4段階評価と自由記述式のアンケートを実施した（評価 4：満足，3：やや満足，2：どちらかという不満，1：不満）。

(2) 結果

① アンケート集計

項目	4	3	2	1
全体の満足度	25 (89%)	3 (11%)	0 (0%)	0 (0%)
プログラムについて	21 (75%)	5 (18%)	2 (7%)	0 (0%)
研修会場の設定について	20 (71%)	8 (29%)	0 (0%)	0 (0%)
配布物・物品について	22 (79%)	5 (18%)	1 (3%)	0 (0%)
職員の対応について	28 (100%)	0 (0%)	0 (0%)	0 (0%)

② アンケートの自由記述より

ア. 講習会全体について

- ・応急処置の講習は本当にすばらしかった。もっとお願いしたかった。
- ・野外教育指導者に必要な能力や、事故にどう対応していくのか色々学ぶことができた。
- ・体験型の講座がとても役に立った。
- ・プログラムの内容と、受講生の人数が適切だったので、講義の内容がよく理解できた。
- ・野外教育でなくても、普段の生活にも必要なことが学べる講義だと思った。一日みっちりやって互いの交流を深められた。
- ・組織作りの講義は、単独で研修会にしてほしい。受講したいです。
- ・講習最後のまとめ方がとてもわかりやすく、参考になった。

イ. 職員の対応について

- ・所長のお話を聞くことができてよかった。
- ・みんな優しい人で、接しやすくてよかった。
- ・あいさつがとても気持ちよかった。

Ⅲ 事業の企画と運営

1. 企画のポイント

野外活動を中心にした青少年教育に携わる施設・機関・団体等のチームリーダー的な役割を担う者は、安心・安全に行われるような活動計画が求められるとともに、緊急時に対応できるように知識とスキルを身につけておく必要がある。

一般的なファーストエイドでは対応困難な事故が起こった場合を想定し、野外での特殊環

境（①医療従事者による処置を受けるために長時間かかる，②長期間に渡り厳しい自然環境に置かれる，③持ち合わせている医療器具に限りがある）では，最善な方法と，より専門的な技術が必要であることから，野外救急法に詳しい講師を選定した。

2. 運営のポイント

- (1) 事前アンケートを送付し，講義に期待することと，研修会の運営に関する要望や質問を郵送してもらった。集約した内容は講師に伝え，受講者のニーズが講義内容に取り入れられるようにした。
- (2) 宿泊型の教育施設の特徴を活かし，研修会後には，講師を招いて情報交換会の時間を設けた。全国から集まった受講者が，研修会の内容や施設運営や業務に関わる内容について，相互に意見交換ができる環境を整えた。情報交換会に講師を招いたことで，講義内容について更に詳しく知ることができた。
- (3) 2泊3日の研修で，受講者同士が過ごしやすくするため，個人プロフィール（所属，参加動機，研修に期待すること等）の用紙を事前に送付し，参加者の同意の下にとりまとめ，プロフィール集として参加者に配付した。また，湯茶や茶菓を用意し，休憩時間にリラックスできるようにした。

3. 成果と課題

(1) 成果

- ① 北海道から沖縄まで，日本全国から受講者を迎えることができた。「マネジメントセミナー」は，本年度4回目を迎えるが，毎年参加する施設等があることから，本研修への期待は大きいものとする。今後，より多くの関係者に参加してもらうためには，さらに，関係者のニーズを把握し，焦点化されたテーマでの企画が必要である。
- ② 本年度は，20名募集のところ，28名の参加者を迎えることができた。機関・団体等に郵送した開催要項からの申し込みが一番多く，有効的な広報手段であった。2月上旬には，申し込み受付を締め切ったが，その後も問い合わせがあり，関心の高さを感じた。

(2) 課題

- ① 開催要項で示した時間内で講習が進まず，夕方に講習を加えるプログラムになった。このため，受講者からはプログラムの進行についての満足度が低い結果になった。講習の進行予定を詳細に把握しておく必要があった。
- ② 防災や災害時の緊急対応を研修の目的とした申し込みがあった。開催要項や募集チラシには，参加者の対象や内容を明確にして，講師・受講者ともに満足度が高い講習となるように努めることが重要である。

4. 参考資料

参考文献やサイト

backcountry classroom Inc.

HPアドレス <http://backcountryclassroom.jp/>

担当：加藤英樹，齋藤勝利，長谷川大地